

# 藩報

# きずな

仙台藩志会



伊達綱村公300年遠忌記念講演会で挨拶する伊達宗行仙台藩志会会長

## 経ヶ峯

七月三十一日と八月一日に行われる石巻の川開き祭りは、伊達政宗公の命を受けて北上川を改修し、石巻に港を開いた川村孫兵衛翁に対する報恩感謝の祭りです。幼い頃、当日

の早朝に飾りつけられる万国旗に心が躍り、その下を自転車で走り回ったものでした。

今春、宮城学院女子大学の学長で当会の顧問でもある平川新先生の「戦国日本と大航海時代 秀吉・家康・政宗の外交戦略」(中公新書)が出版され、話題になりました。

第六章には、一六一六年の駿府上がりの折に、政宗公が部下に語った内容が紹介されています。その中に、「幕府軍との戦いで」「武運つたなく敗れたとしても城を枕にして討ち死にしたいはならない。残る人数を引き連れて石巻に引き込むべし。北上川を前に戦えば、上方勢は思いもよらぬ長陣を余儀なくされるだろう」との一節がありました。

改めて、川村孫兵衛が北上川の治水事業に着手した年を調べてみると、一六一八年となっています。これにあたって政宗公と孫兵衛の間でどのような会話がなされたか。もちろん、それを知る由はありませんが、たまたま二つの年が重なるのを知って、その後の石巻の発展の礎について、あれこれと想像をたくましくしました。

(仙台藩志会 副会長 伊達啓公)

# 今に生きる大條

——六百年の歴史の中で——

大條二十代 伊達 宗行

## 立家は室町時代

伊達八代宗遠公の三男、孫三郎宗行が始祖。応永二十二年（一四一五）の立家で、大條（おおえだ、初め大枝）を名乗り、大條城を拠点に活動。伊達はこの頃室町幕府に直結せんとし、これを嫌う鎌倉管領と激しく争っていた。やがて世は戦国の動乱となり、貞山政宗公が登場する頃、大條は七代宗直の時代である。

## 茶室問題

戊辰百五十年、今となれば昔の絆で悩む事はあるまいと思っていた矢先、この問題が浮上し、「今に生きる大條」が必要になって驚いている。天保三年（二八三三）、大條十五代道直は拔群の功績で秀吉公由来の茶室を齊邦公より拝領し、川内屋敷に移設した。これは其後大條文化の拠点となり、広く愛され利用されて来た。そして戊辰の動乱にもめげず、其後二度の移設を経て現在山元町坂元三の丸にある。しかし老



山元町坂元に移設された大條道直ゆかりの茶室。（昭和期の写真）

朽化が進み、震災を受け、補強材でかろうじて立っている状態である。ところが最近、再建運動が急速に盛り上がり、期待が高まった。去る六月九日には保存祈念フォーラムも開かれている。

（仙台藩志会会長）

# 成実公、相馬を駆ける

仙台藩志会 顧問 伊達 元成

平成三十年は伊達成実公の生誕四五〇年にあたります。北海道伊達市では、四五〇年を記念して亘理伊達家に伝わる能楽「摺上」を上演しました。摺上は江戸時代後期に、仙台藩内で創作された秘曲です。政宗公が蘆名氏を破って、奥羽の覇者となった「摺上原の戦い」について語る勝修羅物です。

平成元年に、仙台市政一〇〇周年記念として半能（後半部のみ上演）として上演されたことがあります。今回は実に百数十年ぶりに全編復曲しました。当日は山田亘理町長もお越しくださいました。奈良県や大阪など遠くから成実ファンが駆けつけていただき、大盛況に終わりました。

一方、毛虫の前立てが有名な成実公の甲冑は、南相馬市博物館に出張展示いたしました。相馬と伊達は仲が悪いような印象を持たれている方が多いのですが、たしかに領地を接していた相馬と亘理ではしばしば内戦もあったようです。しかし、平成二十四年に新発見された「奥州相馬氏野馬追図屏風」（伊達市教育委員会蔵）がその関係を

一気に見直す契機となりました。この屏風は亘理伊達家中の数名が、何年か相馬野馬追の行事を見に行き、詳細にその様子を記録して屏風に描いたものです。これにより必ずしも相馬も亘理も緊張関係が常時続いていたのではないことが読み解ける資料となりました。

この屏風を解析するにあたり、相馬市博物館の二上文彦学芸員から野馬追文化の情報提供をいただきました。その縁で今回、成実公の甲冑と、この屏風が南相馬市で初お披露目する機会を得ることになったのです。きっと相馬藩と仙台藩の関係が見直されたことでしょう。

今年には成実公生誕四五〇年であり、戊辰一五〇年です。そして来年、伊達市では亘理伊達家による開拓から一五〇年を迎えます。四月三日には「だて歴史文化ミュージアム」が開館いたしますので、この機会にぜひお越しください。

（亘理伊達家当主）